

発 達 23 (367~374)

座長 馬場雄二・松田文子

- 367 知的活動時の内言の筋電図法による検討
京都大学 中須賀 淑 子
- 368 思考内容と対応する脳波の左右差について
一言語的思考時と非言語的思考時のアルファ波
の比較—
筑波大学 東 條 吉 邦
- 369 開眼手術後における色彩視の成立過程
日本女子大学 望 月 登志子
- 370 児童と成人の時間評価に及ぼす速度評価の効果
2
広島女子大学 松 田 文 子
- 371 幼児の思考の発達に関する研究
—模倣条件下における組み立て課題と「知的行
為の多段階形成論」との関係—
愛媛大学 玉 川 公 代
- 372 固定された構えの構造に関する研究
宮城教育大学 山 下 直 治
- 373 図形の複雑性の評価に及ぼす過去経験と態度の
影響
室蘭工業大学 馬 場 雄 二
- 374 ストループテスト利用による表音・表意文字へ
のアプローチ (III) 平仮名・漢字差異の発達の
傾向
—中学1年生・2年生・大学生の比較—
大阪大学 土 谷 彰 克

中須賀(367)の発表に対して、馬場が例え内言活動とEMGとの関係を仮定しても、言語性、空間性課題全般にわたり、同一のレベルの内言活動が生起しているのではないかと質問した。答：内言概念自体が曖昧なものであり、また言語性課題の言語性の意味が厳密なものではない。

東條(368)には、田中(香川大)が課題提示後5秒経過してから脳波をとっているのは何故かと質問した。答：5秒くらい経過しないと脳波が安定しないからだ。問：提示直後の方が興味深いのではないか。答：その通りだと思ふ。問：左右差係数は定まっているのか。答：最近の研究ではこれがよく使われている。

望月(369)の発表後、馬場がSendenの事例研究から開眼直後は混沌としているが自然に色彩視は生じる

と理解していた。答：症例によって開眼後色彩視については問題のない場合と、ある色覚に関しては自然に成立する場合とがある。訂正。p. 373, 左1行目。赤(5R 4/4)→赤(5R 4/14)

松田(370)の発表に対して、馬場は松田らの1966年以後の時空速相対現象の研究成果を認めながら、更に時空速の錯覚を利用した発達的研究はないものかと問いかけた。答：この研究以外にはない。

玉川(371)には、町田(常葉学園短大)が第3条件の4才児の誤りの数が多いのは条件効果によるものか、母集団の偏りによるためかと糺した。答：後者と考えている。問：第5条件の外言化で言語化しにくい場面はなかったか。答：色彩と形状との言語化だから別になかった。

馬場(373)の発表に対して、東條が漢字は抽象度の高い概念伝達に有利であり、失語症の減少にも役立っている。漢字の制限使用や簡略化よりルビ付きでも使用制限を撤廃した方がよい。答：大多数の国民の立場から考えれば制限は必要であると思ふ。問：幼児期から漢字に馴染ませれば漢字ショックは防げるのではないか。答：優秀成人の見解と思ふ。問：表意文字としての利点は如何。答：なんとしても表記に不便であり、表意性に依存するために個々人の概念形成が阻害されているのではないか。この問題は振り出しに戻って慎重に研究し直す必要がある。

土谷(374)には東條が教育心理学者としての平仮名、漢字教育のあり方を糺した。答：漢字使用の利点は視覚的・表意的・音読的なことであり欠点は文字数が多く音読的でないことである。いずれにせよ資料不足であり今後の課題である。

本分科会は知覚・認知的方面から発達の側面を明らかにしようとした発表が多く、そのために研究の方向が多岐にわたり討論が分散的になったのも止むをえなかった。今後、望月、松田には継続研究を強く望みたい。馬場は最近の傾向とした幼児の漢字ショック、ハイティーン年代の漢字離れの資料的裏付けをすべきである。中須賀、東條、玉川、土谷には問題意識を深めると共に方法の再考を望みたい。山下は問題設定から出直すべきである。最後に発表者、討論参加者、大会役員の労に心から謝意を表するものである。

(馬場雄二・松田文子、文責、馬場)